

秋田院内銀山の医師から学ぶ
わらび座ミュージカル「よろけ養安」
その人生とは

2005年1月21日(金) 午後7時~9時

講師:財団法人民族芸術研究所 茶谷十六氏

会場・ドーンセンター



宿屋の経営者であり、鉱山経営の役員でもあった、秋田の医師・門屋養安が天保6年(1835年)から明治2年(1869年)まで35年間書き綴った日記、個

人的な記録が、当時の人々の暮らしを今に伝えるツールとなった。それは、院内銅山の暮らしを浮き彫りにしたばかりに、人の一生をどう生きるか。何が幸せか、コツコツと地道に長生きしてソコソコに出世して幸せを築くことが至上の幸福感となった現代人からみると、院内銀山で働いていた鉱夫たちは長く細くよりも、太く短く楽しくに終始しているようだ。佐渡の銀山のように、囚人が厳しい労働を強制させられたというイメージがあったが、院内銀山は、秋田藩直轄の銀山で、全国から優秀な鉱夫がやってくる。まず、技術試験があって、ほとんどが振るい落とされたが、残ったものには、過酷な労働条件と引き換えに普通の人の10倍という高額な年収が保障された。今で言えば年収6,000千万以上といった高収入ながら、厳しい労働によって30歳までに持つ命かどうかという短命。短い人生をよく働き、よく遊び、楽しんだ。記録に残る献立には、初夏に刺身も膳を飾った。冷蔵庫もない時にと驚くが、冬の間に鳥海山の雪を氷室に入れてそれを牛の背に乗せ運んでくる。多くは腐るが、助かった数匹が高値で膳に並ぶ。みな豪華な家に住み、ご馳走に舌鼓を打つ。肉体労働には、牛肉が滋養にいいと食され、日本酒ばかりか南蛮酒を飲みながら、高級な漢方薬も大阪経由養安の元に届けられ妙薬として人々の口に入った。更に、大坂から、文楽の一座や芝居、落語に、大道芸と、様々な芸人がやってきた興行記録が日記に記されている。また銀山の運転資金を大阪の秋田藩邸経由で大坂の商人から賄っていた。

この日記を綴った門屋養安は、新庄藩士の中でも名門の家柄に生まれながら、生まれる前に父と死別し、里元に帰って再婚した母とも引き離され、十数歳で異郷の地秋田で医師となり、和歌や俳諧、茶道、華道、謡曲、囲碁、将棋、書画などの多彩な趣味を持ち、茶道にいたっては、江戸からきた家元の代稽古をするほどの多芸家で83歳まで長生きする。50歳で妻と死に別れると、2人の後添えをもらうが、先生の月参りだけは絶やさなかった。二人の娘と共に、養子の泰安と孫の文台には、それぞれ藩校明德館の医学館に入門させ領内屈指の名医に育てあげる。娘や息子、孫たちに囲まれ、高い地位と名誉を身につけながら、人生を楽しみながら生きている。猫が好き

で、お酒が好きで、人々の笑顔を見るのが好きで、くよくよせず、前向きに行き続けることによって、孤独な少年が自らの人生を切り開いていく……。石川県出身で、金沢大学法文学部史学科を卒業し、高校教師を務めた後、69年に民族歌舞団わらび座に入座した茶谷十六氏。地域の歴史を研究しているときに、院内銀山の医師、門屋養安の存在をしり、その日記が秋田県公文書館に保存されているとき、膨大な日記をマイクロフィルムにより撮影し、全文の解説・筆写しに丸三年かかったが、たざわこ芸術村のメンバーからワープロに打ち込んだ文章をパソコンに転換して、デジタル化し、そのデータを検索機能を使って処理すれば、おもしろい分析ができるのではという提案を受けて処理。人名・地名・職能などのキーワードで検索すれば日記の中からその文章・単語を含んだ記事を検索・分析。秋田魁新報社から「門屋養安日記」の世界を出版。2001年「秋田県多喜二祭賞」受賞。人知れず書き綴った日記を、百年以上もたってデジタル化してその生き様を語られるとは、いつも時代の先取りをしていた養安もさぞかし驚いたことだろう。更に、養安の人生がミュージカルなり全国で上演されるとは、これも流石に養安が生前には思いもつかぬこと。

一人の孤独な少年がどのように人生を切り開き生きていくのか。院内銀山を訪れた芸人たちとの交流も交え、養安が劇団わらび座の舞台上で蘇る……。さて、どのように蘇るのか。それは、舞台を観てのお楽しみ。大阪での公演は、**3月11日(金)午後7時から大阪府立青少年会館で上演される劇団わらび座のミュージカル「よろけ養安」を観てのお楽しみ。(指定席5000円)**

その上演の後援団体の一つに塾塾も参加。塾生の山本ゆきさんの故郷・秋田の湯沢は養安が青春を過ごした所、今回の講座はわらび座の関西事務所との共催。地域医療が問われる昨今、地域の人々と泣いたり笑ったりしながら、医療に従事し貢献した養安の姿から学ぶことは多かった。当日は塾生以外にもわらび座ファン約30名が駆けつけ熱心に茶谷氏の話に聞きいっていた。

院内銀山(現秋田県雄勝町)は、慶長11(1606)年に発見され、佐渡・石見・生野と並ぶ大鉱山として、その生産量と技術を誇った。秋田藩の直営鉱山として藩の財政を支えると同時に、天下の御役山として幕府におおいに重要視された。

天保4(1833)年から10年以上にわたって、年間的主銀高が1千貫(3.75ト)を越える「天保の盛り山」と称される最盛期を迎え、幕府が全国から買い上げる銀の6~8割を産出した。

銀山町は、江戸から大坂から一流の芸能や豊富な物資などがもたらされて賑わい、人口3000人にも及ぶ多様な人々が参集する一大文化の町を作っていた。

その後、明治維新をへて近代化を推し進める中で絶頂期を迎えるが、鉱脈の掘り尽くしなどでしだいに衰退し、昭和29(1954)年には完全閉山し、約350年にわたる長い歴史の幕を閉じた。

塾生:秋山建人・阿久根昌夫・鍛冶睦子・北原祥三・塩谷圭一・下野譲・坂田誠治・杉山英三・中村孝夫・原季美子・原田彰子・村上蕪芳・山本ゆき

